

ノーモア・ヒバクシャ通信 第49号

2019年12月13日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>
継承ブログ <http://keishoblog.com/>
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>
ツイッター <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者
NPO 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)
Email hironaga8689@gmail.com
郵便振替口座 00110-5-292881
口座名義 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

★ もくじ ★

I. (予告) 平和のつどい「ノーモア・ヒバクシャの声を世界に」のご案内	1
II. 被爆者運動に学び合う学習懇談会《シリーズ14》のご報告	
「被爆＝『こころの被害』をめぐって」をテーマに	2
次回 学習懇談会《シリーズ15》のお知らせ	5
III. 資料庫部会から	6
1) 調査研究関連文献リストの公開 / 2) ご寄贈ありがとうございました	
IV. 《寄稿》2年目の「秋桜祭」展示にとりくんで 昭和女子大戦後史PJ	7
V. 《寄稿》スーザン・サザード氏 来日イベントに参加して 宇治川康江	8
VI. 《紹介》「炎のメモワール」公式サイト	10

ローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇は11月24日、被爆地の長崎と広島を訪れて演説し、核兵器廃絶を鮮烈なメッセージで訴えました。長崎では「核兵器から解放された平和な世界を実現するためには、すべての人の参加が必要です」とあらゆる分野の人々の参加と一致団結を促すとともに、政治指導者に対しては「核兵器は、安全保障への脅威から私たちを守ってくれるものではない、そう心に刻んでください。」と強調しました。広島では「戦争のために原子力を使うことは、現代において、犯罪以外の何ものでもありません」「核戦争の脅威で威嚇することに頼りながら、どうして平和を提案できるでしょうか」「原爆と核実験とあらゆる紛争のすべての犠牲者の名によって、声を合わせて叫びましょう。戦争はもういらない!」と訴えました。

このようなローマ教皇のメッセージにも呼応して、私たちは今こそ、「ノーモア・ヒバクシャ、ノーモア・ウオー」の声を世界の隅々に発信するために、さらに大きく行動に立ち上がりましょう。

I. (予告) 平和のつどい「ノーモア・ヒバクシャの声を世界に」のご案内

2020年は、被爆75周年、国連発足75年とNPT発効50年、4月から5月のNPT再検討会議には世界から大きな関心が寄せられることでしょう。2020年はまた、東京オリンピック・パラリンピックが開催され、訪日する海外の人々が飛躍的に増大する年になるでしょう。こうしたときに当たり、改めて国内外の人々にさまざまに「ノーモア・

ヒバクシャ」を訴え、広げる機会を提供することは、とても有意義なことと考えます。

私たちは、原爆被害の実相と被爆者の原爆とのたたかひを受けつぎ、人類の未来につながる「ノーモア・ヒバクシャ継承センター」を東京に設立するため、募金活動に取り組んでいます。そのバックアップキャンペーンとして平和のつどいを開催します。オリンピズム原則「人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進をめざす」理念に賛同し、「ノーモア・ヒバクシャ」を呼びかけます。

1. 名称（仮称）

東京オリンピック・パラリンピック記念 平和のつどい
「ノーモア・ヒバクシャの声を世界に」

2. 企画概要

（日 時） 2020年7月21日（火）午後2時～5時

（会 場） 日本青年館大ホール（1200名）、（最寄駅：銀座線外苑前駅徒歩5分）

（参加費） 2000円予定

（構 成）

第一部 合唱組曲「こわしてはいけない」（指揮 池辺晋一郎）

第二部 被爆の記憶を継承するために

朗読劇「夏の雲は忘れない」より（女優と子どもたち）

発表 昭和女子大学 戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト

未来につなぐ被爆の記憶プロジェクト

報告 国連NPT再検討会議の参加者から

演奏 「原爆を許すまじ」ほか（ユーグント・フィルハーモニカ）

募金の訴え

3. 関連行事

原爆展の国連大学（東京青山通り）開催を検討中です。決まり次第、ご案内します。

II. 被爆者運動に学び合う学習懇談会《シリーズ14》の報告

「被爆＝『こころの被害』をめぐって」をテーマに

10月26日、ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会の第14回「被爆者運動に学び合う学習懇談会」を開催しました。

今回のテーマは「被爆＝『こころの被害』をめぐって」。会場となった立教大学・池部うろキャンパスの教室には、「非被爆者にとっての原爆という経験の意味」を学びはじめた小倉康嗣ゼミの学生を含む35人（うち被爆者8人）が、「今日はパワーポイントを使わず、じっくり議論したい」という精神科医の中澤正夫さんのお話に耳を傾け、時間を延長して熱心に議論をしました。

■ 中澤さんの問題提起＝要旨＝

従来、原爆被害はからだ・こころ・せいかつに3分割してとらえられてきた。それは正

しかっただろうか？——まず、こう問題を投げかけて中澤さんの報告は始まりました。

原爆がいかに人を傷つけたか、という観点から被害を分類するなら、「人とは何か」が問題になる。ヒトは高い知能を持ち、社会を形成し、一人ひとり違った「心」を持っている。過去・未来を区別し、言葉で他者と交流し、現在をそれなりの矜持をもって生きている。独自の自分と自分を取りまく環境（現存在）は一人ひとり全く違うが、「現存在であること」は同一である。

原爆は、それぞれ独自に築いてきた世界やこれからの夢も含む「現存在」を、急激に、



根こそぎ破壊した。被爆者のほとんどが「一番つらいのは心の被害」というのはこの意味であり、したがって、原爆の被害はすべて「心の被害」として括ることができる。

被爆者の「こころの被害」についての記録・研究は本当に少ない。従来の被害分類では、「心の被害＝精神疾患の増減、新発生」にとどまり、トラウマ論にさえいかなかった。

肥田舜太郎、千葉正子両医師

らにより「ぶらぶら病」が抽出され海外にも広まっていったが、代々木病院での10年間の追跡調査によって、ぶらぶら状態は線量により誰でも呈するプロトタイプ（原型）で、「新精神障害」ではないと結論づけられた。

被爆者のおかれた状態を現存在的に分析したのはR. リフトンだ（『死の内の生命 ヒロシマの生存者』朝日新聞社、1971）。彼の功績は、死の呪縛、罪の同心円、精神的麻痺等を鍵概念として抽出し、生存被爆者が背負う悩み・痛み・苦しみを言語化・構造化したことにあるが、解決の道や未来を示唆するものではなかった。

石田忠とその門下生らが長年とりくんだ被爆者調査では、被爆者が長き漂流（逡巡）の末、原爆と対峙し、のり越えてゆく必然性を被爆者の中に見出し、反原爆の哲学（核廃絶と国家補償）へと止揚している（『反原爆—長崎被爆者の生活史』『原爆体験の思想化』）。非被爆者もまた、その後を追うことの可能性を示唆したともいえる。

私がPTSDをとり上げたのは、目に見えるからだやくらしの被害と共通の言語をもつための数量化としてであって、これでこころの被害を語るのは間違いだ。しかし、被爆体験が最悪のトラウマ、PTSDをもたらしたことは事実だ。最近、チェルノブイリの被害者たちに、フラッシュバックならぬフラッシュフォワードが起きているという報告があった。未来も希望もなく、後ろ向きの人生を送って自死に至る。3/11以後のフクシマにも見られ、広島・長崎でも同じことが起こっていたと考えられる。

■ 討議のあらまし

《「被爆者に『なる』」をめぐって》

○ 「非被爆者もその後を追う可能性」とは？ 昨年、昭和女子大の文化祭で「被爆者に『なる』」がテーマとしてとりあげられたが、自分にひきつけてみると、被爆者の生き方、やってきたことから学びたいと思う。記憶にもとづく証言が可能なのは、被爆時13歳くらいまでだろう。被爆者が少なくなっていく中で、体験のとらえ方も変わっていく。一桁被爆者、胎内被爆者、2・3世、支援者…、この先どう考えていけばよいだろうか。

中澤：一番議論したかったところ。放射線の被ばく者にはなれないが、たたかっている被爆者に共感し、運動に近づけていくことはできるのではないか。

○ 被爆者の生き方を子どもたちに伝えられる教師になりたいと思って教師になった。平和教育の研究会で言われた「原爆は被害の体験で、それだけでは不十分。加害の体験も伝えなければ」に違和感をもった。一人の人間が生きていくときに、原爆を体験したことがどういうことなのかを、子どもといっしょに深く考えたいと思った。

○ 「被爆者に『なる』」を安易に使うことには批判的だ。被爆者が核兵器廃絶をなぜ求めるのか。それは原爆をのり越えたからではない。ふたたび被爆者をつくるな、という主張の背景には、今なお原爆に苦しんでいる実態がある。

原爆は様々な苦しみをもたらしたが、被爆者を突き動かしているのは、その被害のすべてではない。例えば、「あの日」の地獄の体験とは何をさしているのか。何十年経っても残っている心の傷など、人間の苦しみを本当に理解していくのは難しいが、溝を埋めていく努力をしていくしかない。

《つらい記憶と向き合い語ることの難しさ》

○ 父と兄2人が被爆。13歳だった兄は建物疎開で被爆し、25キロ離れた自宅に帰ってきた。当初3日間は興奮して話しつづけたが、その後は誰にも語らず生涯を送ってきた。その兄が、フクシマ後、80歳過ぎてから少しずつ語り始めた。自分の体験を話すようになってきたら明るくなってきた。気持ちの面で変化がおき、楽になる部分もあるのだろうか。

○ 福島ではまだ語られていない。被ばくを語ると、それだけでアウトだ。広島・長崎も語るどころまでいくには、かなり時間がかかったと思う。国内外から学者らが入ってきて、語ることは非常にいい、向かい合い、言語化することが大事だと言うが、現場ではかえってマイナスが大きく、地元の人はやらない。福島は被ばくをどういう形で受けとめたらよいか、模索している。

中澤：語ることによって、フラッシュバックは必ず起きる。語ることがいかに大変か。放射線の影響ひとつとっても学者どうしが混乱し、結局、一人一人の判断に任せている状況だ。住んでいない人のいうことはあてにならず、計画してもっていったことは、ことごとく失敗している。月に1回支援に入る私は「風の人」と言われている。時々来て、地元で気づかぬ視点を出してくれる、それだけでいい。あとは余計な口はださなくていい、ということだ。

○ 7歳で被爆した私も、長いこと語れなかった。目の前で亡くなった大好きだった「おねえちゃん」（従姉）や従兄、建物疎開で引っ越すまで通っていた本川小学校でほぼ全員死亡した児童…。亡くなった人たちのことを話せなかった。被爆者であることを理由に結婚差別を受け、それを承知で結婚してくれたのが今の夫だが、子どもを産むときには悩んだ。毎晩話し合い、亡くなった人たちが私に命をさずけてくれた、と産み育てる決意をした。その後も、とても元気だった次女が癌で亡くなり、一昨年には2人の弟が相次いで亡くなった。つらいから忘れたくてしょうがなかったが、忘れられなかった。

証言するようになって35年ぐらいになる。始めから事実を語ってはいたが、だんだん自分の本当のこと（深い心の中のこと）が言えるようになったと思う。

○ 被爆者の役員のなかでも、「証言の場」では、肝心なこと、一番つらかったことは、なかなかしゃべらない。

《初めて被爆者の話を聞いた学生たちの感想から》

○ 自分たちは、忘れようと思えば忘れられるくらいのことでも、過去のいやなことに向き合うのは難しい。被爆者の体験は、忘れられない、何十年経っても逃げるできない圧倒的なものだと思った。

○ 漂流から抵抗は、原爆に打ち克ったからと思っていたが、今なお苦しんでいるからこそ、核兵器をなくしたいと思っているのだと、新たな気づきを得た。

○ 圧倒されることも多いが、若い世代がこの問題とどう関わっているのか、ゼミ活動をつうじてもっと考えていきたい。

《最後に》

○ 中澤さんは、被害を3つに分割したのは正しかったか？と言われた。運動の中では、「3つのほしょう」「（国が国家補償をすべき）3つの責任論」…といったことばが使われてきた。いずれも中身ははっきりしないが、「3つの〇〇」と言われると、何となく分った気になる。これは何なのかをよく考えてみてほしい。

原爆の体験は、核兵器廃絶への大きなエネルギーになってきた。しかし、二大要求のもう一つである国家補償、援護法論のなかでは、必ずしも政策化されずにきた。被爆者運動の中で、心の被害をつぐなえ、という点には重点が置かれてこなかった。それはなぜなのか。課題は解けぬまま残されている。

中澤：私には、被爆者がいなくなったら、どうやってこの世界を救えるのか、という思いがつよい。結局、人間とは何かというところに行きついてしまう。敵も人間、ヒトラーも原爆を落としたトルーマンも人間だ。今もいつ使われるか分からない状況にある。人間は、限りないすばらしさと限りない悪さをもつ、矛盾に満ちた生き物だ。

知らない人たちに、どれだけ広く伝えられるか。継承の会の役割もそこにある。

次回 学習懇談会《シリーズ15》のお知らせ

次回、被爆者運動に学び合う学習懇談会（第15回）は、年明けの1月18日（土）、「彼らは何を訴えるのか—被爆50年原爆被害者調査（自由回答）の報告」をテーマに関

催します。

現行の「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」が制定された翌1995年に実施された日本被団協の「原爆被害者調査」は、この法についての意見などに関する自由記述回答が未集計のまま残されていました。四半世紀後の今年、大学院の授業でその整理・分析にとりくんだ根本雅也さんと受講生に報告していただきます。

詳細および申し込みについては、同封の案内チラシをご参照ください。

Ⅲ. 資料庫部会から

1) 調査研究関連文献リストの公開について

継承する会の発足以来、現在までに収集・整理してきた書籍・冊子類のなかから、広島・長崎の原爆、被爆者にかかわる調査・研究関連文献の目録を、継承する会および日本被団協のホームページで公開しました（11月15日）。

【みなさまへのお願い】

1. 当会では、広島・長崎の原爆、被爆者に関する調査研究文献を可能なかぎり網羅的に収集・保存することをめざしています。
 - 1) この目録に含まれていない文献（自費出版、私製版も含む）についてご存知の方は、その情報をお知らせください。
 - 2) 上記文献をお持ちの方でご寄贈いただける方は、ぜひご連絡ください。
2. 当会としては、できるだけ複数部数を備えたいと考えています。この目録で所蔵部数3部未満の文献についても、ご寄贈いただければありがたく存じます。

※ なお、この目録についてのお問い合わせ・ご連絡は、下記（継承する会資料庫部会）へお願いします。

E-mail : info@no-more-hibakusha-archives.net

郵送先・電話・ファックス：日本被団協 気付

〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-5 ゲイブルビル902

TEL 03-3438-1897/FAX 03-3431-2113

2) ご寄贈ありがとうございました

広島二中（3年生）で被爆した亀井賢伍さん（神奈川県在住）より、様々な証言誌に掲載されたご自身と同級生らの手記（6人分）を送っていただきました。

また、作家の梶山季之氏（朝鮮から引揚げて二中に転入した同期生）関連の書籍『積乱雲 梶山季之―その軌跡と周辺』『梶葉 終刊特別号』、歌人の近藤芳美氏（二中の先輩）の著書『青春の碑』（第一部、第二部）を、さらに、中山士朗著『私の広島地図』、高木昌彦著『続 一学徒の手記―核兵器のない平和の思想をめざして』、小谷瑞穂子著『ヒロシマ巡礼―バーバラ・レイノルズの生涯』など24冊を寄贈していただきました。

貴重な書籍・資料のご寄贈に、心よりお礼申し上げます。

IV. 《寄稿》2年目の「秋桜祭」展示にとりくんで

昭和女子大学 戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト

2019年11月9日・10日の2日間にわたって開かれた昭和女子大学第27回秋桜祭において、「戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト—被団協関連文書—」に参加する同大学生13名が企画展「被爆者の『発見』」を開催した。両日とも晴天にめぐまれ、497名の来場者が訪れた。

プロジェクト2年目となる今年の展示では、「NGO国際シンポジウム原爆被爆者調査」（1977年調査）と「原爆被害者調査」（1985年調査）に注目した。被爆者の心の中にまで踏み込む2つの調査によって、被爆者の原爆体験が言語化され、社会の共有財産として「発見」されるに至るプロセスを4章構成で示した。



熱心にパネルや資料に見入る来場のみなさん

第1章では、1万人以上の被爆者を対象とした1985年調査のうち、被爆者の心の奥まで踏み込む質問項目を展示し、なぜこのような調査が1985年時点で可能になったのかを来場者に問いかけた。第2章では、聞き取り形式でおこなわれた1977年調査の生活史調査が、「健康、生活、精神」の縦軸と「被爆前・被爆時・被爆後・現在」の横軸を組み合わせた被爆者の丸ごとの人生に対する原爆の影響を調べる構造をもっており、この調査によって被爆者の実相が丸ごと捉えられたことが1985年調査につながる一因となったとした。第3章では基本懇答申（1980年）の「受忍論」から1985年調査への歴史の展開を示した。そして「原爆被害者の基本要件」を踏まえながら、「受忍論」に反論するための根拠を探る調査として1985年調査が企画されたからこそ、1985年調査は徹底的な設問をもつ調査となったのであろうと結論づけた。また第4章では1980年前後の日本被団協の調査を支えた調査チームを取り上げ、調査に込められた意図を示した。

今回の展示では来場者を巻き込むアクティブな試みにもチャレンジした。

まず、来場者にシールを渡し、印象に残ったパネルに貼って頂いたが、その結果1985年調査の調査項目や1977年調査の調査票が驚きをもって受けとめられたことが分かった。また岩佐幹三氏の原爆体験や濱住治郎氏ら胎内被爆者の想いについても多くの関心が寄せられた。

次に、1977年の生活史調査の分析表を実際に手に触れていただき、印象に残った調査内容にコメントを付して頂く場を設けた。この「史料解説」の作業には、多くの方々に熱心に取り組んでいただき、1977年調査で被爆者の内面に深く触れた当時の調査員の気持ちを

追体験して頂けたと実感している。

今回の展示を企画するにあたり、私たちがこれまで整理してきた被団協関連文書の解読や、岩佐幹三氏、木戸季市氏、濱住治郎氏、吉田一人氏（50音順）への聞き取り調査などをおこなった。史料から歴史像を紡ぎだすプロセスでは、30回を超えるミーティングでの議論を積み重ね、展示案構成も数度にわたってアップデートし、大きく成長できたと感じている。

こうした歴史学の手法によって、被爆者運動を歴史として認識できるようになれば、「あの日」の出来事だけでなく、原爆に向き合い続けてきた被爆者の経験を共有財産として後世に伝えていくことができるのではないかと考えている。

末筆ではあるが、協働団体としてご支援頂いたノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会、特に栗原淑江氏、インタビューに応じて下さった被爆者の皆さまに多大なご支援を賜りましたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。

V. 《寄稿》『ナガサキ核戦争後の人生』

著者スーザン・サザード氏 来日イベントに参加して

賛助会員：宇治川康江（翻訳家）

米国に住むノンフィクション作家スーザン・サザードさんが12年の歳月を費やし、長崎被爆者の人生と原爆の実像に迫った『ナガサキ核戦争後の人生』の日本語版出版を記念し、11月9日と10日の二日間にわたり、長崎市でイベントが開かれました。

この本の翻訳者として、私は一年以上にわたりサザードさんと親交を深めてきたこともあり、今回の来日を心待ちしていました。執筆にあたり、彼女は本に登場する5人の被爆者、谷口稜暉（すみてる）さん、和田耕一さん、堂尾みね子さん、永野悦子さん、吉田勝二さんはじめ多くの被爆者にインタビューを重ね、深い信頼関係を築いてきました。



サザードさん（前列右）と共に 後列左端が宇治川さん

9日のイベント（長崎原爆死没者追悼平和祈念館の交流ラウンジ）では、そのような被爆者との長年にわたる思い出をサザードさんが日本語で語り、長崎の朗読者グループ「永遠（とわ）の会」のメンバーが、この本の中からサザードさんが抜粋した各被爆者の人生を印象づける場面を朗読しました。5名の内のお一人で今回参加して下さった永野悦子さ

ん（91歳）は、原爆で亡くした妹さんと弟さんのことを、「自分が無理やり疎開先から長崎に連れ戻したばっかりに…」と今でも悔み切れない思いを語り、最後に「どうか戦争のない平和な世の中を築いてってください」と訴えられました。会の様子はNHK長崎放送局によって、夕方のニュース番組でもとりあげられました。

10日は長崎原爆資料館ホールで、「歴史と向き合う：被爆地から学んだこと」と題した特別市民セミナーが開催され、第一部はスーザンさんの基調講演、第二部では芥川賞作家の青来有一さん、詩人で絵本作家でもあるアーサー・ビナードさん、そしてスーザンさんによるトークセッションが行われました。

基調講演では、サザードさんが、まずこの本が生まれるきっかけとなった谷口稜暉（すみてる）さんとの30年以上前の運命的な出会いや、12年という出版までの長い道のりについて語りました。谷口さんから直接聞いた過酷な被爆体験に強い衝撃を受け、原爆の事実をもっとよく知りたい、被爆者たちが戦後何十年もの間どんな思いで過ごしてきたのか、その答えを見つけ出したいという思いが彼女を本の執筆へと駆り立てました。その後幾度となく長崎を訪れ被爆者、放射線専門家、原爆医療関係者を含め多くの方々と面談し、幅広い調査や資料の翻訳、実際の執筆とその修正作業を経て、原爆投下から70周年目を迎える2015年、ようやく『NAGASAKI: Life After Nuclear War（ナガサキ：核戦争後の人生）』はアメリカで出版されました。

講演の中でサザードさんは次のように述べています。「今でも、多くのアメリカ人は、[原爆投下が戦争を終わらせ、何十万、何百万というアメリカ人の命を救った]というアメリカ政府の公式見解を強く信じています。そのため、原爆が長崎と広島の人々にもたらした悲惨な事実から目をそらしています。また世界中の人々が抱く原爆のイメージも、広島・長崎の上空に舞い上がるきこ雲であり、遠い昔に起きた抽象的な出来事でしかありません。被爆地の人々に及ぼしたとてつもない苦しみを知らないままです。そんな中、被爆者の体験を知り記憶にとどめることが大きな意味を持っています。自分の身に起きた体験を語る時、そのストーリーは偏見や拒絶感をやわらげ、相手の心に染みていきます。人々の考えを変えることは容易なことではありませんが、自分と重ね合わせることでできる説得力のある被爆者証言にふれるとき、国、文化、世代を超えて人々の心に伝わっていくものがあります。」

そして最後に、「日本に投下された原爆とは比べものにならないほどの破壊力を持った1万5千にもものぼる核兵器が存在する現在、私たちは自分たちの命と環境が想像を絶する規模で破壊されてしまうという大変な危機に直面しています。そして、この兵器が何をもたらすかを語り続けてきてくれた被爆者たちの実体験を私たちはしっかりと記憶にとどめる責任があります」と訴えました。

トークセッションでは、青来さんが、「被爆者の体験を単に語り継ぐというより、歴史の事実として正しく理解した上で、その思いを共有し、自分の言葉で身近な人たちに伝え共有していくことが大切」と述べました。ビナードさんからは、「今まであまりにも被爆者に頼りすぎてきた。これからは被爆者の体験をそのまま語り継ぐというよりも、客観的に見つめながら工夫していくことも可能だ」と提言されていました。サザードさんからは、

「自国の戦争被害だけでなく、他国に及ぼした加害の歴史にもしっかりと向き合う姿勢が必要。それを直視したくないと思う気持ちが被爆体験や戦争体験から耳をそらすことにもなっている」との発言がありました。

本に登場する5人の被爆者は長年語り部として原爆の悲惨さを学生さん達はじめ多くの人々に語り継ぎ、「長崎を最後の被爆地に」と訴え続けてこられました。心と体に負った深い傷に苦しみ続けながらも、それぞれの個性を生かし、“核なき世界”という同じ目標に向かってひたむきに努力されてきました。自分たちのような体験は、もう誰にもさせたくないという強い思い、今度は私たちがそれをしっかりと受け止め、人間の持つ限りない想像力を十分に働かせ、自分たちの言葉として伝え発信していく時がきています。原爆や戦争の実体験の有る無しにかかわらず、次世代のために平和な世界を引き継いでいくこと、それはすべての人々の願いであるからです。

VI. 《紹介》「炎のメモワール」公式サイト

昨年10月に亡くなられた小野英子さん（元正会員）は、母・山本信子さんが広島被爆の2年後に英文で書き残した被爆体験記「炎のメモワール」（原題：「THE ATOMIC BOMB IN HIROSHIMA」）を多くの人々に読んでいただけるよう、日本語に翻訳して遺されました。

このほど公式サイトを開設されたご遺族からの依頼を受けて、継承する会が横田和彦さん、漆原牧久さんのご協力により原文（英文）の校閲を行いました。リニューアルされたホームページで、日英両文を読むことができます。

<https://honoo-no-memoir.themedia.jp/>

小野英子さんは、母・山本信子さんが英文で「炎のメモワール」を書き残した事情を次のように記しておられます。（2018年5月）

「信子は、1906年（明治39年）、日系移民二世として、アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市パウワヒ街に生まれました。アメリカ国籍を持ち、現地の学校に通って英語で教育を受けましたが、13歳のときに日本に帰って広島に住み、英語教師となるべく勉学に励みました。そして、同じように英語教師を目指していた山本信雄にめぐりあい、結婚。信雄は旧制県立広島第二中学校（広島二中）の、信子は旧制広島市立女学校（市女）の英語教師として働き、私の姉・洋子と私・英子の親となりました。

1945年8月6日、広島に一発の原子爆弾が投下され、爆心地近くで二中の1年生321人と共に建物疎開の作業に従事していた信雄は、全身に火傷を負って、その日のうちに死亡。洋子は観音国民学校の校庭で被爆し、2日後の8月8日朝、郊外の救護所で死亡しました。

原爆投下2年後という、まだ心が血を噴いているような状態の中で、なぜ信子はこの手記を書いたのか。それは、世界の人々に原爆の悲惨さを知ってもらいたいという願いからでした。手記はアメリカの『TIME』誌宛てに送付されましたが、GHQの検閲にかか

って没収され、願いはかないませんでした。』

信子さんは 70 歳のときに甲状腺がんで亡くなりました。遺品の中に手記を発見した英子さんは、日本語に訳して 1982 年に出版（『炎のメモワール』汐文社）。その後長く絶版になっていましたが、2018 年夏、有志の協力で小冊子として刊行されました。

この Web ページは、英子さん亡きあと、ご遺族により公開されたものです。

国内外のお知り合いにも紹介するなど、ぜひ多くの方々に読んでいただけるよう、ご協力ください。